

Y6-05

これからの乳がん診療 ～チーム医療の要としての合同カンファレンス～

石巻赤十字病院 乳腺外科

○^{ふるた}古田 ^{あきひろ}昭彦、伊藤 正裕、玉置 一栄、大橋 清子

【背景】当院は診療人口約30万人の医療圏における唯一の地域がん診療連携拠点病院であり、ほぼ独占的に乳がん診療になっている。全国的に乳がん診療部門は乳がん罹患数の増加、検診受診率の上昇、診療の複雑化・専門化などから絶対的・相対的マンパワー不足の状態が続いている。この状況の中で限られた人材で最大の診療効果を上げるべく、チーム医療の推進に取り組んでいる。特にその要というべき「合同カンファレンス」の開催について報告する。

【乳腺外科の概況】乳腺外科専従医2名。平成24年の初発乳癌年間手術件数123件、年間外来患者数延べ9000名（うち通院乳癌患者実数約1000名）新規紹介患者数914名

【乳腺がん合同カンファレンスの概要】週1回平日昼に開催。所要時間最大30分。参加メンバー：1.「乳腺外科チーム」乳腺外科医、外来担当看護師、病棟看護師、病棟薬剤師、メディカルクラーク、遺伝カウンセラー、CRC 2.「緩和ケアチーム」緩和ケア専従医、精神科医、口腔ケア担当歯科医、緩和ケア認定看護師、心理療法士、管理栄養士、理学療法士、リンパ浮腫セラピスト 3.「放射線治療チーム」放射線科医師、看護師、放射線技師 4.「化学療法チーム」腫瘍内科医、化療センター看護師 5. 地域医療連携部門：MSW、退院支援看護師、などである。互いに多忙な中、多数職種が同席し、具体的な患者案件の討議、乳がんに関連する様々な情報の共有などを図ることの意義、有用性を強く主張したい。

Y6-07

『美容塾』～化学療法中の患者さんのキレイをチームで応援～

松江赤十字病院 がん相談支援センター¹⁾、看護部²⁾、緩和ケア認定看護師³⁾、栄養課⁴⁾、リハビリテーション課⁵⁾、乳がん看護認定看護師⁶⁾、乳腺外科⁷⁾

○^{かきもと}柿本 ^{かな}可奈恵¹⁾、足立 えみ²⁾、川上 和美³⁾、安原みずほ⁴⁾、^な稲本 ^な恵子⁵⁾、天野 浄衣⁶⁾、林 美幸⁶⁾、村田 陽子⁷⁾

がん化学療法による副作用は、体調の変化だけでなく脱毛や肌のトラブルなど外見の変化も起こし精神的苦痛を伴う。白血球の低下や、嘔気嘔吐などの身体的苦痛については、副作用対策としての様々なサポートがあり、支持療法の進歩によって苦痛が緩和できるようになってきたが、今までのサポート内容に美容のことまでは含まれていなかった。

乳癌治療中の場合、乳房喪失に加え、脱毛や皮膚トラブルが生じることによる顔貌の変化が大きく、活動範囲を狭めるばかりでなく、治療の中断に繋がりがかねない。

女性のがん患者のQOLを向上させ、治療を継続しながら、女性らしさを保ち、いきいきとした社会生活を送るための支援を目的に、当院乳腺外科部長の発案で「美容塾」を立ち上げた。

構成メンバーは院内の女性スタッフ（医師、看護師、理学療法士、栄養士、MSW）である。これまでに、患者向け・医療者向けの講演会や、治療中のスキンケア・メイクセミナー等を開催している。また、そのまとめとして、「お手入れ読本」を作成した。肌の手入れ、脱毛やカットの紹介とともに、毎日の過ごし方やリラックス方法等、日常生活全般を応援する内容となっており、各職種が専門分野を担当し当院独自のパンフレットとなっている。

この活動は、患者の不安解消となっただけでなく、患者自身がセルフケアイメージを獲得し、QOLを高める一助となっている。また受身ではなく前向きになることで、闘病意欲を継続させる効果が期待できると思われる。今後多職種で協働し、チームメンバーの様々な発想によりエンパワメントに繋がる患者支援をしていきたい。

Y6-06

当院におけるがんサロンの運営とその問題点

日本赤十字社長崎原爆病院 地域がん診療連携拠点病院運営委員会

○^{たにぐち}谷口 ^{ひでき}英樹、畑地登志子、柴田健一郎、中島 誠司

【はじめに】日本人二人に一人はがんに罹患する時代となり、患者サイドからの要望により各施設でがんサロンが開設されるようになった。がん患者は様々な悩みや不安を抱えており、主に精神面での手助けをする場としてがんサロンがある。当院ではがんサロンを有効に活用し、癌治療の一助とすべく取り組んでいるのでその一端を報告する。

【経緯】当院は2002年12月に地域がん診療連携拠点病院に指定された。2009年にがんサロンの立ち上げを計画し同年7月にふれあいサロン（フラミンゴカフェ）を発足させた。

【基本的な約束事】1）会の運営は医療スタッフと参加者で行う。2）参加者は他の参加者への干渉をしない。3）特定の食品、治療、宗教等を勧めない。4）個人情報厳守。5）参加は自由であり、体調を優先する。などを緩やかなルールとした。

【当院の現状】毎週月曜日14～16時に開催しスタッフは1～3名参加している。月に一回は講演会やイベントを開催し、毎回内容や講師は変更とした。他の会は基本的にお茶を飲みながらのおしゃべり中心の会としている。当院におけるがんサロンの問題点は、幾つかあるが、参加者の固定化、新規参入者の減少、運営スタッフの負担増などが挙げられる。

【考案】がんサロンはがん患者の精神面での手助けをする場と位置付けられ、地域がん診療連携拠点病院である当院も積極的に運営に関わるべきと考える。今後は特定の患者さんやスタッフに依存することなく、多職種からなる組織として積極的に対応をする方向で検討している。

【結語】当院におけるがんサロンの現状と問題点につき概説する。問題点も多いため、改善も必要である。今後他施設とも情報交換をはかり、よりよいがんサロンを目指してさらに努力していきたい。

Y6-08

臨床心理士によるコンサルテーション・リエゾン活動について

伊勢赤十字病院 医療技術部 臨床心理チーム

○^{なかい}中井 ^{まり}茉里、水谷 恵里、長谷川智規

【問題】近年、特定機能病院やがん診療連携拠点病院などでは、医療の専門化、高度化に伴い、治療を受ける患者や家族に対する心理的ケアのニーズが増加している。患者は皆、「健康な身体」の喪失を経験しており、個人差はあるものの、何らかの精神的ストレスを感じていることは想像に難くない。身体的疾患で外来通院患者の10～20%、入院患者の30～40%に、うつ病や適応障害、せん妄などの精神障害が合併しているとの指摘もある。また、多職種によるチーム医療の重要性が増しており、全人的な医療サービスの提供が求められている。総合病院において、身体科に入院している患者の心理的ケアを行うことを、コンサルテーション・リエゾン活動という。コンサルテーションとは、依頼に対し、専門知識を用いて相談に応じることを指し、リエゾンとは、多職種連携によってケアを行うことである。当院の臨床心理士は、精神科外来業務に加え、緩和ケア、がん医療、糖尿病、血液疾患など、身体疾患患者に対し、心理的ケアを行っている。その対象は、患者本人や家族、ひいては医療者も含まれ、内容は、精神疾患として治療が必要と判断し、精神科受診につなげるケースから、傾聴といったカウンセリング、家族面接、スタッフのコンサルテーションなど、事例によって多岐にわたる。臨床心理士が介入することで、患者・家族の心理的ケアのみならず、医療者との良好なコミュニケーションの構築、他職種スタッフと情報を共有することで、より質の高い医療を提供することにも貢献できるのではないかな。

【目的】当院における臨床心理士のコンサルテーション・リエゾン活動の実態・傾向を分析し、概観することを目的とする。

【方法】2013年6月～9月に臨床心理士が介入を行った事例を集計・分析し、結果の詳細を報告する。